

JA全農ウイークリー

JA ZEN-NOH WEEKLY

Web版
JA全農ウイークリーは
こちらから

<https://www.zennoh-weekly.jp/>



2面

召しませ春を
山形県産「啓翁桜」をPR
(山形県本部)

6-7面

「農家の嫁」
アマゾンに行く
大津愛梨氏
(元NPO法人田舎のヒロインズ理事長)

配送先変更(住所・宛名)、
配布部数変更はこちら



<https://forms.office.com/r/yUWVHyVVtK>

写真提供: JA全農ミートフーズ(株)

召しませ春を 山形県産「啓翁桜」をPR

官邸訪ね高市首相に贈呈

山形県本部



「啓翁桜」を手にする高市首相(中央右)と吉村知事(中央左)、折原会長(左から4人目)ら

山形県が日本一の出荷量を誇る「啓翁桜」が本格的な出荷時期を迎えたことから、高市首相に花束を贈呈し、今後の販売強化に向けPRしました。

受けた意気込みを報告。その後、生産者が栽培方法について説明し、満開の啓翁桜を贈呈しました。同席した鈴木憲和農相は「私たちの国のか花が外に向かって稼いでいくチャンスをさらにつくつていきたい」と話しました。

受け取った高市首相は「真冬の桜をありがとう。一足早い春を楽しめていただく」と笑顔を見せました。

山形県の啓翁 桜は、12月中旬から4月中旬まで出荷が続き、全国での販売に加え、香港やアラブ首長国連邦のドバイなどへの輸出を予定しています。

二〇一九年六月

埼玉県幸手市、JA埼玉みずほと連携協定

「ゆめファーム全農」を基軸に地域農業の振興へ

耕種資材部

幸手市とJA埼玉みずほ、JA全農との 地域農業の振興に関する連携協定締結式



連携協定を締結した(右から)JA埼玉みずほ・遠藤美行代表理事組合長、幸手市・木村純夫市長、全農・日比健常務理事

生産性向上を目指し、2014年に「ゆめファーム全農プロジェクト」を立ち上げました。

この実証で得られた「安定多収栽培技術」を普及させるため、2026年秋ごろに新規就農者向け研修施設「ゆめファーム全農トレーニングセンター・幸手」を同市に開設します。

リの生産温室を備え、約2年間の研修プログラムを通じて新規就農者の育成を担う拠点となります。

今後はセンターを基軸に、全農が「技術・モデルの構築・提供」、同市が地域社会の「土台の整備」、JAが現場での「実装・定着」を担い、三者が一体となり農業振興に取り組んでいきます。



協定締結式の参加者

News!



「飛騨ほうれんそう」の出荷作業を省力化

希望をのせて、飛騨の新センター始動

岐阜県本部



テープカットで開所を祝う



ホウレンソウの自動計量

本センターは、生産者から「出荷作業の負担を減らしたい」という声を受けて計画。当初は地域生産者による運営を検討しましたが、実現が難しく岐阜県本部が事業を担当しました。設備はメーカーと協議を重ね、既存機器の活用に加え、専用のコンベヤーやレーンを導入することで効率と品質を両立しています。

新センターでは、根や下葉の除去から袋詰めまでを機械化。ホウレンソウはベルト

コンベヤーで流れ、最新の調製機や自動計量器、自動包装機により手作業の工程を大幅に省力化しました。特に県内初の10連自動計量器を2台導入し作業効率を高めています。4～12月には外部労働力を活用し、1日約1800kgを処理予定です。

式典には関係者約30人が出席し、「産地を盛り上げたい」「生産量減少の危機を乗り越えたい」との声が上がり、地域農業の未来を支える拠点として期待が寄せられています。

岐阜県本部は1月4日、「飛騨ほうれんそう」の出荷を支える「飛騨青果物パッキングセンター」を開所しました。生産者の声から生まれたこの施設は、負担軽減と産地の未来を守るために大きな一歩で、2026年4月から本格稼働します。

News!



温暖化に打ち勝つ高品質な富山米を

「ほおばる幸せ。富山米」生産推進大会を開催

富山県本部



大会の様子

大会は、温暖化などの気候変動に打ち勝つ、低コストかつ省力的な人と環境に優しい「安全・安心」な米づくりを推進目標に掲げました。地域の課題に応じた指導・支援などによって消費者や実需者に高く評価される米づくりのため、生産者、関係機関・団体が一丸で高品質でおいしい富山米の安定生産・安定供給の推進を目的に開催しました。



講演する道又課長

富山県本部は1月28日、富山県、JA富山中央会と連携、「ほおばる幸せ。富山米」生産推進大会を開催。生産者やJA・行政機関から約200人が参加しました。

大会は、温暖化などの気候変動に打ち勝つ、低コストかつ省力的な人と環境に優しい「安全・安心」な米づくりを推進目標に掲げました。地域の課題に応じた指導・支援などによって消費者や実需者に高く評価される米づくりのため、生産者、関係機関・団体が一丸で高品質でおいしい富山米の安定生産・安定供給の推進を目的に開催しました。

富山県本部の高畠康則米穀園芸部長が、最近の米穀情勢について解説。JAみな穂の道又正幸農企画課課長は「富富富」とJAみな穂10年の歩みと題して、「富富富」導入に向けた現地試験から、現在に至るまでの苦労や取り組みを紹介しました。富波里の河本祥久常務は「米粉の可能性」について講演し、米粉の基礎知識や最近のトレンドについて説明し、米粉の魅力を語りました。

JA全農チビリンピック2025

第7回 全農杯 全日本小学生カーリング選手権 大会に特別協賛 「軽井沢ジュニア」2年ぶり優勝



参加した子どもたち



ゲストコーチによるデモンストレーション



「もぐもぐブース」で食材を手に取る選手ら



熱戦となった決勝戦



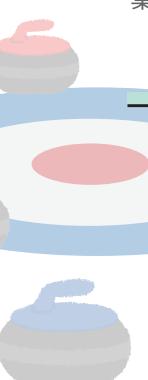
決勝戦の様子を解説するアンガールズとコーチ



優勝した「軽井沢ジュニア」

副賞を贈呈

ルズやゲストコーチの解説入りで
YouTubeにおいてアーカイブ
配信しています。



全農は12月21日、横浜市の横浜銀行アイスアリーナで開催された「JA全農チビリンピック2025 第7回全農杯全日本小学生カーリング選手権大会」に特別協賛し、出場選手の皆さんを「ニッポンの食」で応援しました。

【広報・調査部】

ゲスト「コーチによる デモンストレーション」

ノビ「アンガールズ」が来場して子どもたちを応援し、大会終了後にはクリスマスプレゼントを手渡しました。

もぐもぐブースで 栄養補給

試合開始前には、大会にゲストコーチとして参加した、谷田康真選手、松村千秋選手（松村・谷田）らによるデモンストレーションが行われ、洗練された投球に、間近で見ていた子どもたちはもちろん、保護者からも大きな拍手が沸き上りました。今大会は特別ゲストとしてお笑いコ

今回も試合前後での栄養補給に「もぐもぐブース」を設置。ニッポンエネルギー商品や農協シリーズをはじめ、本会が原料供給している「赤飯おこわ」「豆腐スイーツバー」や飲料などを提供しました。

白熱した決勝戦

決勝は軽井沢ジュニアと岩手ジュニアが対戦。ゲストコーチが見守る中、白熱した試合展開の末、6-3で「軽井沢ジュニア」が2年ぶりに優勝を飾りました。決勝戦の模様は、アンガ

リスマスツリーに飾ることができるコーナーも設置し、「チビリンピックで優勝する！」などのメッセージが集まりました。

優勝から3位までのチームには、副賞としてパールライスのお米と【究極冷凍】黒毛和牛サーロインステーキを贈呈し、全チームには参加賞として「キーマカレー」や「豆乳」、包装餅などを渡しました。

全農はこれからも、子どもたちの健康づくりや将来を担う子どもたちを「ニッポンの食」を通じてサポートしていきます。

第7回全農杯全日本小学生カーリング選手権大会試合結果		
優勝	準優勝	3位
軽井沢ジュニア (長野)	岩手ジュニア (岩手)	チーム岡山・愛媛 (岡山・愛媛)
4位	5位	6位
新潟ジュニア (新潟)	札幌ジュニア (北海道)	チーム東京千葉愛知 (東京・千葉・愛知)
7位	8位	
チーム青森キッズ (青森)	富山ジュニア (富山)	

YouTubeチャンネルでの配信 「日刊スポーツ」



組合員の所得増大を目標に 米を軸に「木産木消」を推進



JA職員、地域の皆さんに見守られながらトウモロコシの種まき体験

JA職員、地域の皆さんに見守られながらトウモロコシの種まき体験

千葉県のJA木更津市は房総半島の中央に位置し、1988年9月から1市1JAとして事業展開しています。西は東京湾アクアラインで対岸の神奈川県川崎市と結ばれているなど交通の便が良く、恵まれた立地にあります。冬は北風が強いものの年間を通じて気候は温暖で、県内でも有数の超早場米の産地です。トウモロコシ、レタス、ブルーベリー、梨などの特

産物の栽培が盛んで、多岐にわたる農畜産物を生産しています。

品質向上への取り組み 地場産米をブランド化

組合員の所得増大を最大の目標として事業に取り組んでいます。管内の基幹作物の米は、高品質米への意識向上や木更津産米のブランド化を目的に、2018年から

は全て一等米となりました。

学給に有機米 100%を目指し 生産者を全面サポート

同JAは高品質な米栽培

に対する意欲が高く、行政と連携し、「木更津市人と自然が調和した持続可能なまちづくりの推進に関する条例」（通称＝オーガニックなまちづくり条例）に基づき、「きさらづくり条例」に基づき、「きさらづ学校給食米®」の栽培・

取り入れ、播種から収穫までの作業について生産者とJA職員が支援しています。

その他、さらなる良食味・

高品質米の試験栽培および販路拡大への取り組みをはじめ、アクアライン周辺のアウトレットパークや地元スーパーで常設している産直コーナーを活用した木更津ブランド農作物の地域内消費拡大「木産木消」への取り組みも進めています。

JAは生産者への提案や資材供給への協力をはじめ、集荷・検査・保管・精米・給食向けの炊飯センターへの配

送まで、一貫したサポート体制で地元の子どもたちの食を支えています。

また、地域のまちづくり協議会や生産者、農業委員会と連携し、地域一体となつた食農教育にも取り組んでいます。農業体験には米はもちろん、特産のトウモロコシも



昔ながらの稲刈り体験はもちろん、コンバインによる稲刈り実演も



粒の張り、つや、品質も良く、カメムシや高温障害の被害粒もなく文句なしの“全量一等米”

JA木更津市 (千葉県)



概要	2025年12月31日現在
正組合員数	3734人
准組合員数	4338人
職員数	133人
販売品取扱高	11億9千万円
購買品取扱高	12億7千万円
貯金残高	829億9千万円
長期共済保有高	2026億2千万円
主な農産物	米、レタス、ターサイ、トウモロコシ、インゲン、ミニトマト、キュウリ、梨、ブルーベリー

「農家の嫁」、アマゾンに行く COP30で「#コフレンドリーファーマーズ宣言」

全農が10月28日に開催した「お米の流通に関する有識者懇話会」第1回 生産者に聴くにご登壇いただいた、元NPO法人田舎のヒロインズ理事長・大津愛梨さん。農業と環境の双方に精通した視点から、懇話会でも多くの示唆をいただきました。今回は大津さんから、昨年11月にブラジル・アマゾンで開催されたCOP30への参加レポートを寄稿いただきました。ぜひご一読ください。

世界200カ国が参加 最新環境技術も展示

農業に従事していると、地球温暖化が着実に進んでいることを肌で感じずにはいられません。ただ問題が大きすぎで、勉強するにも行動するにもどちら手をつけて良いか分からぬという方も多いのではないでしょうか。

私は大学と大学院で環境問題の勉強をし、在学中に同じキャンパスで勉強をしていた「農家の後継者」を射止めしたこと

で「農家の嫁」になりましたので、就農当初から温暖化防止は意識していました。最近では「環境おばちゃん」的な立場になり、COP30という国際會議に参加する機会を頂いてブラジルまで行つてきましたので、その報告をしたいと思います。

COP（ COP）とは、国連

気候変動枠組条約の締約国会議のこと。難しい名前ですが、つまりは地球温暖化を防ぐ枠組みについて世界各国が集まって議論する場のことです。30回

目となる2025年の会議は、ブラジルのアマゾン地方で開催され、世界中から約200カ国の代表団が参加しました。

ニュースなどで報道されるCOPの様子は、各政府の代表が会議室で難しい顔をし



全農も含むスポンサーや連携機関のロゴを集めたバナー

ながら交渉している模様ではな
 いでしょうか。実際、交渉は大
 変難航したそ�で、期待されて
 いたレベルの合意には至りませ
 んでした。

しかし、現地のCOP会場
 はもつとずっと友好的で、ほと
 んどお祭り。「ブルーゾーン」「グ
 リーンゾーン」「アグリゾーン」
 という3つの会場があり、その
 うち、アグリゾーンはCOP30
 で初めて設置されたそうです。

農業分野に関する環境技術の
 研究やサービスやプロジェクト
 などが集結していく熱気にあ
 ふれました。屋内ではカーボン
 ネガティブをうたつたコ
 ヒーやワイン、サトウキビから
 できるバイオエタノールで走るハ
 イブリッド車、熱帯雨林の再生
 をを目指す育苗技術などが展示
 され、屋外ではアグロフォレスト
 リーの試験栽培などが見学で

ながら交渉している模様ではな
 いでしょうか。実際、交渉は大
 夘難航したそ�で、期待されて
 いたレベルの合意には至りませ
 んでした。

しかし、現地のCOP会場
 はもつとずっと友好的で、ほと
 んどお祭り。「ブルーゾーン」「グ
 リーンゾーン」「アグリゾーン」
 という3つの会場があり、その
 うち、アグリゾーンはCOP30
 で初めて設置されたそうです。



COP30のブルーゾーン（メイン会場）の入り口に立つ（左から）大津さん、Yaeさん、成瀬さん

農業から環境保全を アグリゾーンで宣言

アグリゾーンへの参加は広く世界から公募され、400以上のセミナー等が催されました。私の



Yaeさんの歌に誘われブラジルの方々も一緒に歌いました

他、半農半歌手のYaeさん、蓮葉果紅社の成瀬久美さん、私たちのブラジル訪問を支援してくれた(株)FreeWillの役員・西村勇哉さんの合計4人で「エコフレンドリーファーマー

ズ宣言」を企画したところ、採択された次第です。

ステージでYaeさんが日本民謡を感じさせるオリジナル曲を歌うと、自然と人が集まってきた。注目を集めたところで、「人は皆、生きるために食べます。その食べ物は誰かが作らなければなりません。食べ物をつくる農業」という言ふを、地球温暖化の原因だと悪者にするのではなく、農業を営むことで環境が良くなつていく社会を目指し、私たち農家自身が行動を起こし始めることをここに宣言します」という宣言文を読み上げました。

その後、日本国内外の取組みを発表する大津さんら

歩より、100人の1歩」。世界中で農業者たちが自分たちにできる小さなアクションから始めたら、未来が少し明るくなるかもと思います。

農業を通じ温暖化防止 生物多様性の実現へ

その数日後。今度はブルー

ーと呼ばれるメイン会場内で、農水省主催のセミナーに登壇しました。タイトルは「ネイチャーポジティブ社会への変革」。温暖化防止と生物多様性は相反するものではなく、両方を目指していくべきもの、という視点からのセミナーでした。

2027年に横浜で開催されるグリーンエキスポは、單なる植栽の美しさを目指すものではなく、里山や生物多様性にまで視野を広げたイベントにするそうで、「農業を営むことで温暖化防止(温暖化ガスの吸収+化石燃料の削減など)と生物多様性の下支えの両方を実現していきたい」という意思表明をしました。



宣言文を発表する大津さんら



農水省主催のセミナーに登壇



先住民の方々から声をかけられご一緒に写真に收まりました

京都府産「聖護院かぶ」のポタージュ発売 ファミマと連携、京野菜で産地連動型の商品

全農と資本業務提携先である(株)ファミリーマートは、商品共同開発の一環で「京都府産聖護院かぶのポタージュ」を1月27日から、関西地区のファミリーマート(約2600店舗)で発売しています。

【京都府本部・営業開発部】

京の伝統野菜である「聖護院かぶ」は、きめ細やかで緻密な肉質、歯切れのよい食感が特徴です。本商品にはその食感を味わえるようにカットしたかぶをトッピング

しています。

ファミリーマートとは、これまでに「賀茂なす」「九条ねぎ」でも連携して商品開発しており、産地訪問による生産者との交流や、京の伝統野菜のPRに継続的に取り組んでいます。

全農とファミリーマートは、両者の強みや特色を生かした協業を通じて、魅力的な国産農畜産物の訴求と販売拡大に取り組んでいきます。



京都府産聖護院かぶのポタージュ



2月25日に「91農業フォーラムin東北」 農業労働力支援への理解を呼びかけ

東北営農資材事業所は、「91農業フォーラムin東北」を2月25日に仙台で開催します。農業の現状と農業労働力支援について理解を深め、参加者自身が「自分たちも地域農業の“新しいパートナー”として貢献できる可能性がある」と考えるきっかけになることを目指します。

【耕種総合対策部】

本フォーラムは、ライフスタイルの1割に農業を取り入れる「91(きゅういち)農業」への理解を深めてもらうために開

催します。元プロサッカー選手の中田英寿氏による特別講演を行うほか、農作業支援を実践する企業やJAからの事例報告、「地域農業を支える連携の在り方」をテーマに、農業ジャーナリストの小谷あゆみ氏とのパネル討論を行います。

事前申込制です。参加希望者は専用フォーム(2次元コード)から申し込みをお願いします。締め切りは2月13日(金)正午まで、定員を超えた場合は抽選となります。



中田英寿氏



小谷あゆみ氏

お申し込みは
こちらから▶



JA全農の産地直送通販サイト JAタウン ショップ紹介

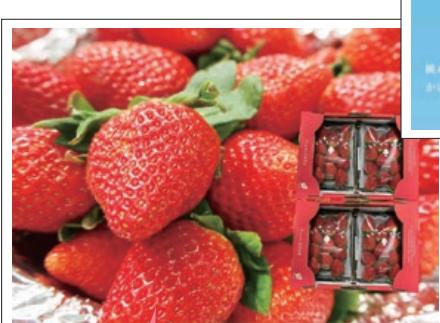
さが風土館 季楽

「いちごさん」は、2018年秋にデビューした佐賀県生まれのいちごです。佐賀県では「さがほのか」以来、20年ぶりとなる新ブランドとして誕生しました。7年もの開発期間をかけ、1万5000株以上の中から選び抜かれた自信作です。

凛と美しい色と形が特徴で、いちごらしい美しい三角すいのフォルムが目を引きます。

華やかで優しい甘さと、みずみずしい果汁も魅力の1つ。ひと口頬張れば、ジューシーな果汁が口いっぱいに広がります。

見て楽しく、食べておいしい「いちごさん」。ぜひ、この季節ならではの味わいをお楽しみください。



佐賀県産「いちごさん」(約240g×4パック)
…3,920円(税込み)

▶ JAタウンはこちらから <https://www.ja-town.com>
▶ お問い合わせは shop@ja-town1.com

ご注文は
こちらから▶

